

予土線

予土線は愛媛県の宇和島と高知県の窪川を結んでいます（JR四国では北宇和島駅から若井駅に至る76.3kmを予土線としています）。予土線は、高知県内では四万十川上流部に沿って走るため「しまんとグリーンライン」という愛称が付けられ、観光シーズンには山吹色のボディの「しまんトロッコ」から四万十川の美しい風景を楽しむことができます。

予土線は、明治44年に創立された宇和島軽便鉄道会社が宇和島から吉野に至る軽便鉄道を願い出たことに始まります。宇和島軽便鉄道は大正元年に宇和島鉄道と改称し、大正3年に宇和島～近永間を、大正12年には近永～吉野（現吉野生）間を開通させました。宇和島鉄道は、国鉄を誘致して四国循環鉄道を促進しなければこの地方の発展はないとの見地から、国鉄による買収を政府に働きかけ、昭和8年に国鉄に買収され、宇和島～吉野生間は国鉄宇和島線となりました。宇和島線では昭和16年に762ミリから1,067ミリへの軌間（レール幅）拡幅が行われるとともに、高知県への延伸工事が着手されましたが、戦争により延伸工事は中止されました。

戦後工事が再開され、昭和28年に吉野生～江川崎間が開通しました。この時、江川崎中学校で盛大な開通式が行われ、江川崎村（現四万十市）では全村をあげて花火、宝探し、仮装行列などの祝賀行事を催しました。窪川～江川崎間は窪江線として昭和34年に着工されましたが、昭和36年に工事が中断されました。大正町（現四万十町）田野々と瀬里の2箇所で四万十川にダムを建設する計画が動き始め、窪江線の予定ルートが水没するという問題が持ち上がったためでした。鉄道の開通を熱望していた沿線住民は失望しましたが、ダム建設計画はやがて立ち消えとなり、昭和39年に窪江線の工事が再開され、昭和48年に窪江線が完成しました。国鉄は昭和49年に江川崎～川奥信号場（中村線との分岐）間を予土線として開業するとともに宇和島線（北宇和島～江川崎間）を予土線と改称して、北宇和島～若井間を予土線としました。土佐大正駅に予土線開通記念碑が建立されています。

予土線の完成により循環鉄道が形成され、鉄道で四国一周することが可能となりました。しかし、ようやく鉄道ができた時に、時代は変化していました。昭和55年の日本国有鉄道経営再建促進特別措置法により、予土線も廃止対象路線となりました。これに対して、沿線の市町村、住民は予土線存続を訴え、陳情や看板立て、パレードなどの運動を行いました。こうした取り組みもあり、予土線は代替輸送道路が未整備のため廃止路線から除外されて存続し、昭和62年の国鉄分割民営化で発足したJR四国に承継されています。

<参考文献：四国鉄道75年史編さん委員会編「四国鉄道75年史」1965年、四鉄史編集委員会編「四鉄史」1989年、愛媛県史編さん委員会編「愛媛県史地誌Ⅱ（南予）」1985年、高知県土木史編纂委員会編「高知縣土木史」1998年など>

